

# 留学生のレポートに見られる 不適切な引用と学生の意識

— レポート分析とインタビュー調査から —

## Inappropriate quotations and citations observed in the reports by non-Japanese students and their mindset – from report analysis and interview –

数野 恵理  
KAZUNO Eri

### 【要旨】

本稿では日本語上級の留学生を対象とした作文コースの実践内容を報告し、受講学生の学期末のレポートの分析とインタビュー調査により、レポートに見られる不適切な引用と学生の意識を明らかにする。調査の結果、調査対象の3名全員が引用の目的を理解していること、積極的に間接引用をしようとしていることが認められた。しかし、インタビュー調査では3名とも間接引用における言い換えの難しさを感じていること、レポート分析では2名のレポートに引用の形態、形式、要約、解釈などさまざまな問題があることが明らかになった。間接引用において引用の範囲を正しく示せない場合は剽窃を疑われてしまう。また、引用元の資料に書かれた内容を正しく要約できない場合には、引用の目的が果たせないばかりでなく、事実を曲げて伝えることにもなる。本稿では、適切に引用する力を伸ばすためにはどのような指導が求められるかを考察する。

**Key word:** レポート、アカデミックライティング、引用、要約



## 1. はじめに

レポート、論文などアカデミックライティングでは引用をしながら自身の考えを述べることが求められる。しかし、アカデミックライティングについて学んだことのない者には、資料に書かれていることを、出典を示さずレポートに書くことが悪いことだという認識がない。また、アカデミックライティングを学んだことがあっても、引用についての理解や日本語力が不十分な場合には、適切に引用することができずに、剽窃を疑われてしまう。

山本（2016、130）は論文執筆初心者の日本人と中国人による卒業論文初稿、修士論文初稿などを分析し、論文執筆初心者の「意図的ではない剽窃」は「引用そのものに対する認識上の問題」、「引用資料の著者と論文著者のモダリティ表現の混同」、「論文筆者の解釈のない引用」によって引き起こされると指摘している。剽窃をなくすためには「中立的引用文」「解釈的引用文」「引用解釈的叙述文」「解釈文」の4種類の機能を理解し、論理展開能力を高める指導が必要だとしている。

また、中村他（2016）は留学生と日本人学生の論文の分析により、不適切な引用には以下の1から7の要素が混在していることを示し、これらの要素を、「構成」、「論の展開」、「引用の目的」に沿った形で指導することが重要であるとしている。

- 1) 必要性……引用する必要があるか
- 2) データの質……引用する資料は一次資料か
- 3) 引用形態……直接引用か間接引用か
- 4) 要約……引用元の内容を正しくまとめ、文脈や書き手の主張に関連付けているか
- 5) 引用形式……引用元がわかる引用形式が使われ、引用の範囲がわかるか
- 6) 量……全体に対するバランスが良く、不要な情報が入っていないか
- 7) 解釈……引用したデータに解釈があるか、解釈が適切か

中村他（2016）でも指摘されているように、山本（2016）、中村他（2016）はどちらも引用の目的を正しく理解させる基礎的な教育が必要であるとしている。

数野（2018）は立教大学日本語教育センターの日本語上級作文コース、「J7 - 3 作文」（以下、J7 作文）の2017年度秋学期の実践概要を報告し、中国からの留学生Aが学期中に書いたレポート4つを分析している。その結果、1) Aは当初、課題とは異なる整理・まとめ型のレポートを書いていたが、学期後半は課題に合ったレポートが書けるようになったこと、2) 主張の論拠を示すという目的でも引用するようになったものの、資料の理解と要約に誤りがあるために引用の目的を達成できないことがあることを指摘した。数野（2018）では1名のレポートのみを分析したが、本稿ではこの学生を含む3名のレポートを分析し、インタビュー調査を実施する。これにより、留学生のレポートに見られる引用の問題と学生の意識を明らかにし、今後の指導に生かしたい。

以下ではまず、J7 作文における2017年度秋学期の実践について報告する。次に、受講学生の

うち中国・台湾出身の3名の学生を対象とし、学期末に提出された最終課題のレポートを分析し、学期末の時点で引用に関してどのような問題が残っているか考察する。さらに、この3名に半構造化インタビューを実施し、留学生がレポートを書く力の変化をどのように自己評価しているか、レポートを書く上で何を意識していたか、引用についてどのような理解を持っているか、レポート作成で何が難しいかを調査する。最後に、学生の引用する力を伸ばすために、どのような指導が求められるかを考察する。

## 2. J7 作文コースの概要

### 2.1 コースの概要

J7 作文コースは中級修了レベルの短期留学生（半年または1年）と大学院生を対象とした日本語上級の作文コースであり、来日時のプレースメントテストで作文のレベルが J7 と判定された学生と前の学期に J6 レベルの作文に合格した学生が履修できる。

本コースでは立教大学大学教育開発・支援センター（2012、2018 改訂）の『Master of Writing』という本学の学生向けのレポート作成の手引きのほか、独自教材を用いて、アカデミックライティングの力をつけるための授業を行っている。立教大学日本語教育センター（2017）が公開している 2017 年度のシラバスにあるように、14 週で5つのレポート課題を課し、最後に作文テストを実施している。基本的に2週で一つのテーマを扱い、1週目にその回のテーマとなる共通の読解資料を読んで内容理解をし、次回までに自分の使いたい資料を集めてレポートのアウトラインを準備し、2週目にクラスメートにそれを紹介し、3週目までにレポートを提出するという流れで進めている。また、学期の前半と後半で一つずつ、計二つのレポートの書き直しを行っている。

立教大学大学教育開発・支援センター（2012、2018 改訂、1）は大学のレポート課題を「1. 自分で調べて考えて書くレポート 集めた資料を根拠として、自分の主張を論理的に述べる（論証する）レポート」、「2. 整理・まとめ型のレポート 集めた資料や授業内容を整理報告するレポート」、「3. ブックレポート 文献が指定され、その要約や内容に対する意見等を述べるレポート」、「4. 実験・実習・フィールドワーク等で得たデータをまとめて考察するレポート」という4つに分類し、1の「自分で調べて考えて書くレポート」について解説している。J7 作文でも「自分で調べて考えて書くレポート」を扱っている。

### 2.2 2017 年度秋学期の実践概要

立教大学では中級終わりの J6 作文でも引用を用いたレポートを書いているため、2017 年度春学期まで、J7 の学生は引用について知っているという前提、つまり引用について復習をするという形で教材が作られていた。しかし、実際には、来日直後に J7 作文を受講する学生も多い。そこで、2017 年度秋学期からは、復習という形ではなく、新しく学ぶという形で引用を取り上

げることにした。

シラバスでは授業の流れだけでなくテーマについてもすでに公開されていたが、古くなっている読解資料もあったため、シラバスの内容からずれないよう注意しながら、レポート1、2、4は新たに読み物を選び直し、テーマ3と5のみ従来の読み物を使用した。レポート1は「ら抜きことば」、「言葉のゆれ」、2は「コト消費とモノ消費」、3は「絵文字」、4は「ゲノム編集」、「生命倫理」、5は「国語力」というテーマを扱った。

レポート1、2、4、5は従来通り、共通の読解資料を読んで論点を考え、そのテーマについてさらに調べ、自身の見解を述べるという課題である。ただし、レポート1はテーマに関連した複数の資料を教師が提示し、学生は新しい資料を集めなくてもよいことにした。このようにしたのには二つの目的がある。一つは、資料に書かれたことを自分の考えのように書いていないか、直接引用を間接引用のように書いていないか、資料の内容を正しく要約しているかなど、学生が引用を適切に行っているかを教師が確認するという目的である。もう一つは学生の負担を減らすという目的である。最初はどのような資料を探して引用すればよいのかわからない学生もいるだろうと考え、こちらで提示することにした。

なお、レポート3の課題は、資料を読んだあとでアンケート調査を実施して報告するという課題に変更した。このようにしたのは、立教大学の「日本語相談室」で卒業論文や修士論文の個別指導をした際、図表の提示方法に問題のあるもの（図表を示すという行動文がない、図表を提示しただけでデータの説明がない等）が散見されたためである。

さて、山本（2016）、中村他（2016）はまず引用の目的をしっかりと理解させることが重要であることを指摘しているが、前学期までの担当講師からも、自分と同じ意見の資料を見つけるとそれをコピーしてしまうという盗用・剽窃の問題、なぜ引用するのかということが理解できていないという問題があると引き継ぎを受けていたため、教材作成にあたってはこの点に注意した。また、形式など個別の要素を指導する際にもレポート全体との関連づけが重要であるという中村他（2016）の指摘を念頭に置き、実践を進めた。

コース開始時には大学で求められるレポートにはどのような種類があるかを確認し、本コースでは「自分で調べて考えて書くレポート」が課題となるということを説明した。また、盗用と剽窃について説明した上で、引用とはどのような目的であるのかということを学生に話し合わせ、引用の形態、形式、要約についても導入・練習した。

引用の形態、形式、要約については、読解資料から直接引用や間接引用で引く練習をした。間接引用で複数の文をひく場合は、引用の範囲が不明確になりやすいため、引用の始まりと終わりを示すための表現を紹介した。引用して自分の意見を述べる（賛成する、論拠として使用する、批判的に論じる）というような練習も取り入れた。「…が述べているように」というような表現についても紹介し、資料に書かれている意見に同意する場合でも、資料を参考にした場合には必ずそれに言及するよう指導した。

また、中村他（2016）が指摘するように全体の「構成」、「論の展開」、「引用の目的」を意識

させながら引用について指導することが重要だと考え、自作のレポートのモデルを提示して文章の中でどのように引用が用いられているかを確認させた。レポートのモデルの中で、どこからどこまでが引用でどこからがレポートの筆者の意見か、それぞれどのような目的で引用されているか、引用の前後にどのような文があるか、どの程度の量を引用しているかなどを考えさせた。

## 2.3 2017 年度秋学期の受講者

J7 作文の受講者は 13 名で、出身の国・地域は中国・香港・台湾が計 8 名、韓国、シンガポール、タイ、フランス、日本（イギリス）が各 1 名であった。13 名全員が学部の短期留学生（半年または 1 年）で、そのうち 11 名は秋学期に来日した学生、2 名は春学期からの継続で春に J6 作文を履修した学生である。

## 3. 調査

### 3.1 調査目的と調査方法

J7 作文コースの修了時点で引用に関してどのような問題が見られるか明らかにするため、学期末に提出された最終課題のレポート 5 を分析する。レポート 5 は国語力に関する新聞記事を読んで考えたことについて、共通資料以外にも二つの資料を引用して 1500 字程度で書くというものである。分析にあたっては、中村他（2016）が挙げた引用の必要性、データの質、引用形態、要約、引用形式、量、解釈のうち、どの要素に問題があるかを見ていく。

また、留学生自身は本コースを受講して書く力がどのように変化したと自己評価しているか、レポート作成時にどのようなことを意識しているか、何が難しいと感じていたか、引用についてどのように理解しているかなどを明らかにするために、半構造化インタビューを実施した。インタビュー調査は授業最終日の 5 日後の 2018 年 1 月 24 日から 2 月 1 日の間に一人 30 分程度行い、録音した。レポートの作成経験と引用の学習歴は授業の初日にも確認したが、インタビューでは改めてこれを確認してから、以下の 1 から 5 の質問をし、最後にレポート 5 の引用の誤りについても尋ねた。

1. このクラスを取って、レポートを書く力は変化したか。  
(変化した場合、どのように変化したか。)
2. 今学期、レポートを書くときに、どのようなことに気をつけていたか。
  - 3-1. 引用の際、どのようなことに気をつけていたか。
  - 3-2. レポートを書くとき、引用の仕方の書かれたプリントをいつも確認していたか。
  - 3-3. 引用は何のためにするか。
4. レポートを書くときに、何が難しかったか。
- 5-1. このクラスで学習したこと、練習したこと、活動などで、レポートを書くときに役に立ったことはあるか。(ある場合、それは何か。)

5-2. クラスでは扱わなかったが習いたかった、あるいは、クラスで扱ったが、もっと練習したかったことはあるか。(ある場合、それは何か。)

### 3.2 調査対象

2017年度秋学期の受講者は半数以上が中国・香港・台湾の学生であるため、レポート分析とインタビュー調査の対象はこの地域の学生とした。協力者は表1に示す3名である。AとBは中国出身で、2017年度秋学期が留学の1学期目であり、日本語でのレポート作成経験はない。Aは数野(2018)がレポート1、2、4、5を分析した学生である。Aは母語で「2. 整理・まとめ型のレポート」を書いたことがあるが、引用についてはどの言語でも学んだことがなかったという。Bは母語で「1. 自分で調べて考えて書くレポート」を書いたことがあり、その際に引用について自分で少し調べたことがあるが、習ったことはないという。Cは台湾出身で、前の学期に立教大学のJ6作文と総合日本語6-8のクラスで引用について学習している。日本語では「1. 自分で調べて考えて書くレポート」と「3. ブックレポート」、母語ではこれに加え「2. 整理・まとめ型のレポート」を書いたことがあるという。

表1 調査対象者の日本語学習背景

	A	B	C
出身	中国	中国	台湾
立教大学での学習	1学期目	1学期目	2学期目
引用についての学習歴	なし	自分で調べた	立教のJ6作文、総合日本語
レポート作成経験とレポートの種類	日本語：なし 母語：2番	日本語：なし 母語：1番	日本語：1、3番 母語：1、2、3番

以下、3.3で最終課題のレポート5の引用箇所を分析し、続いて3.4でインタビュー調査の結果を報告する。ただし、インタビューではレポート5の引用についても質問しているため、これに関するインタビュー結果は3.3のレポートの分析部分で報告する。

### 3.3 最終課題レポート5の分析

#### 3.3.1 留学生Aのレポート

Aは母語を含め、どの言語でも引用について学んだことのない学生である。Aのレポート5は日本の国語力の現状(低下)、その原因、国語力の重要性、対策という構成になっており、8ヶ所に引用がある。

この中で特に問題のあった部分を以下に示す。例1でAは「国語力を向上する必要がある」という主張の論拠を示すために引用を試みているが、引用形式だけでなく、要約、解釈に問題があるため、論の展開にも問題が生じている。

## 【例 1: 学生 A のレポート 5 の抜粋①】（下線部は引用に問題のある箇所）

文部科学省（2004）によると、国語は「個人にとっての国語」「社会全体にとっての国語」「社会変化への対応と国語」という3つの側面をもっている。それゆえ、国語は知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の3つの基盤を成す重要な存在なのである。それに、前記の熊本大学教育学部元学部長大迫靖雄氏が言うように、知的活動・感性・コミュニケーション能力の基盤となる国語の基礎ができていなければ、物事をきちんと考えることもできないのである。国語力の低下は論理的思考能力の欠如という問題につながる。だからこそ、国語力の向上は大きな重要性をもつのである。そのため、国語力を向上する必要があるが大いにある。

笠井光俊、2001、「[新教育の森]『生きる力』を考える・第4部 学力／2 深刻、国語力の低下」『毎日新聞』、朝刊、2001年6月6日、3面。

文部科学省、2004、「これからの時代に求められる国語力について」、<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm)>（2018年1月20日アクセス）。

まず、引用形式の問題から見てみる。文部科学省（2004）の引用は最初の一文のみのように読めるが、実際は下線部、「それゆえ」で始まる二文目の内容も引用であり、引用の範囲を正しく示すことができていない。次に要約の問題を見てみよう。引用元を確認すると、「知的活動」「感性・情緒等」「コミュニケーション能力」の基盤になるというのは「個人にとっての国語」の役割であり、「社会全体にとっての国語」「社会変化への対応と国語」とは関係がない。つまり、引用元の資料を正確に読み取って要約することができていないと言える。

さらに、4行目の文にも要約と解釈の問題がある。「知的活動・感性・コミュニケーション能力の基盤となる国語の基礎ができていなければ、物事をきちんと考えることもできない」とあるが、「知的活動・感性・コミュニケーション能力の基盤となる国語」という部分は笠井（2001）で紹介されている大迫の考えではなく、文部科学省（2004）で述べられている内容である。そもそも、「きちんと考えること」は知的活動のことであり、感性とコミュニケーションは関係がない。よって、この文において「知的活動・感性・コミュニケーション能力の基盤となる国語」という説明をするのは不適切である。

この段落で文部科学省（2004）の説明と笠井（2001）で紹介された大迫の発言を引用するのであれば、順序を変えて、以下のように論を展開する必要があるだろう。

1. 国語ができなければ論理的思考能力が欠如するという大迫の発言（笠井 2001）
  2. 国語は、論理的思考といった知的活動の基盤であるだけでなく、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤にもなる（文部科学省 2004）
  3. 国語力はこれらすべての基盤となるものなので、国語力を向上する必要がある
- 以下の例 2 にも、引用形態と形式のほか、要約の問題がある。

## 【例2: 学生Aのレポート5の抜粋②】

国語力を向上させるには、まず、政策の面で国語教育を変えなければならない。そのために、文部科学省はさまざま試みを行ってきた。

例えば、読売新聞朝刊（2004）によると、その計画2003年に文部科学省が2年分の国語力向上計画を立てた。その計画には「話す」「聞く」「書く」「読む」の基本能力を高める指導法の研究、国語と他教科との関連指導などがおこなわれた。

山崎誠、2004、「教科の枠を超え『国語力』アップ 自分の考え、言葉で説明できる?」、『読売新聞』、2004年9月27日、朝刊、31面。

まず、形態と形式についてだが、最後の文の「『話す』『聞く』『書く』『読む』の基本能力を高める指導法の研究、国語と他教科との関連指導」という部分は記事とまったく同じ表現なので、直接引用にして「」に入れ、ページも示す必要がある。また、新聞記事ではあるが、記者の名前があるため、出典を示す際は山崎（2004、31）とするよう指導していた。次に、要約の不適切さを見てみる。確かに文部科学省は2年分の国語力向上計画を立てたのだが、この計画は国語力向上モデル事業のモデル校のための計画である。この説明がないと日本全国の学校のための計画を立てたかのように読めてしまう。

数野（2018）で報告したように、Aはレポート4まで引用形態と形式の誤りが少なかった。しかし、レポート5では直接引用に「」がない、引用であることはわかるが出典が明記されていない、出典（情報）の書き間違いがあるといった誤りが散見された。また、本文の出典と参考文献の情報の不一致も見られた。

以上、Aのレポート5は引用形態、形式、要約、解釈の問題が見られた。要約と解釈が誤っていると、引用の目的が果たせないばかりでなく、事実を曲げて伝えることにもなってしまう。また、その前後の論の展開に問題を生じさせることにもなるため、正しく要約、解釈する力をつけていくことが求められる。

インタビュー調査でAはレポート5における引用形態と形式の誤りの原因として、レポート4までは引用の仕方についてクラスのプリント教材を確認していたがレポート5では確認せずに書いたこと、学期末で課題が多く思うように時間がかけられなかったことを挙げている。引用の形態と形式について言えば、確かにレポート4までは誤りが少なかったため、引用の仕方を確認しながら時間をかけて書けば、これに関する誤りは減らすことができると思われる。

### 3.3.2 留学生Bのレポート

Bは引用について習ったことはないが、母語でレポートを書く際に自分で少し調べたことがあるという学生である。レポート5は中国語力の低下、その原因と対策という構成で書き、7ヶ所で引用をしている。形式が不適切なものが1ヶ所見られたものの、多様な引用の表現形式を用いて適切に引用している。また、背景を説明するため、例や根拠を示すためといったように、引用の目的も明確である。形式に問題があるものを例3に示す。



## 【例 3: 留学生 B のレポート 5 からの抜粋】

賀が述べているように、中国語力の低下が長期的かつ普遍的なものになれば、母国語である中国語自体が退化する恐れがある（人民網 2010）。

人民網日本語版、2010、「中国人の母国語力低下 8割『危機を感じる』」、『人民網日本語版』、2010年12月21日、<http://j.people.com.cn/94475/7238244.html>。

人民網（2010）で紹介されている賀の見解に賛成して自分自身の意見を述べる場合、「人民網（2010）において賀が述べているように、…恐れがある。」などとしないと、「恐れがある」とうのが自分の意見であるということが不明瞭である。また、下線部「中国語力の低下が長期的かつ普遍的なものになれば」は記事と同じ表現なので「中国語力が長期的、普遍的に低下した場合には」などと言い換える必要がある。

Bは一つ前のレポート4で、以下に示す誤りをしている。

## 【例 4: 留学生 B のレポート 4 からの抜粋】

日本経済新聞（2017）で指摘されているように、生殖細胞の遺伝子を改変したら、影響は本人だけでなく、子や孫にも及びかねないという。

\* 提出されたレポートの参考文献に日本経済新聞（2017）がなかったため引用元は不明

レポート4のフィードバックの際、口頭でも指摘したところ、用法を勘違いしていたことがわかった。「…で指摘されているように」の後には、引用元で示された意見に賛成する自分の意見が続くため、「という」は使えないということを確認した。レポート5の作成時点でこの用法は理解していたものの、例2の場合は、人民網の記事で紹介されている賀の見解に賛成するという事でやや複雑なこともあり、間違えたようである。インタビューで「…で指摘されているように」の用法を確認したが、この用法については理解できていることがわかった。

Bは本コースを受講する時点では、引用について習ったことはなく、自分で少し調べたことがあるだけであったが、1学期の間はかなり正確に身につけ、効果的に引用できるようになったと言える。

## 3.3.3 留学生 C のレポート

Cは前の学期にも引用について学び、レポートを書いたことのある学生である。Cは国語力の重要性、日本における取り組み、台湾における課題という構成でレポート5を書いている。引用は3ヶ所に見られる。3ヶ所すべて引用の前または後に自分の意見が述べられており、自分の意見をサポートするために引用をしようとしているが、問題もある。

3ヶ所の中で特に問題のあった箇所を以下に示す。

【例5: 留学生Cのレポート5の抜粋】

児童は、遊びが好きな年頃だと思う。この年頃の児童は、遊びを通じ、いろいろな知識を身につけるはずである。もし授業と遊びと組み合わせることができれば、子供の授業に対するの興味も上げられると考えられる。山崎（2004）は、東京都目黒区立中目黒小学校の取り組みを追った。中目黒小学校は、文部科学省の「国語力向上モデル地域研究推進校」と指定されており、国語の時間に漢数字と助数詞の学習は手遊びや縄跳びと組み合わせ、遊びの中で言語感覚を豊かにさせるようになった。

東京都目黒区立中目黒小学校でのもう一つの意欲的な試みが児童の保護者にも参加を呼びかける「土曜親子国語教室」である。古典や言葉遊びなどで日本語の面白さを体験させ、好評である（山崎、2004）。それは、子供の国語力を高めるには、親が家庭で日本語（国語）に関心を持つ意識も大事だからためである。

山崎誠、2004、「教科の枠を超え『国語力』アップ 自分の考え、言葉で説明できる?」、『読売新聞』、2004年9月27日、朝刊、31面。

一つ目の下線部、「もう一つの意欲的な試みが児童の保護者にも参加を呼びかける『土曜親子国語教室』」は山崎（2004、31）の記事とまったく同じ表現であるが、直接引用を示す「 」とページ数が書かれておらず、引用の形態と形式が不適切である。

二つ目の下線部、「それは、子供の国語力を高めるには、親が家庭で日本語（国語）に関心を持つ意識も大事だからためである。」は、「だからためである」となっており、文法的にも誤りがあるが、それより大きな問題がある。この書き方では、あたかも自分の考えのように読めるが、実際は山崎（2004）の記事で紹介されている西村の見解である。引用であることを示すことができず、形式が不適切である。

一度に複数の文を用いて引用をする場合、学生にとって引用の範囲を正しく示すのは難しいため、クラスでもそのための表現を紹介している。Cは3行目から9行目の「山崎（2004）は…を追った。…。…である。…である（山崎、2004）。」までは、引用であることを示すことに成功しているので、複数の文を間接引用する方法は理解していると思われるが、最後の文が自分の意見ようになってしまっている。

また、引用元では、子供の国語力を高めるには親の関心も重要であるということは、親子教室を開催することの理由として述べられている。親子教室が好評であることの理由として述べられているのではないため、要約にも誤りがある。つまり、この部分は引用であることが示されていないという引用形式の問題と、記事に書かれた内容と異なるという要約の問題が混在している。

インタビュー調査でこの部分の誤りについて尋ねたところ、Cは次のように回答した。レポートを書いてからしばらく時間が経っているため、はっきりと覚えていないが、一つ目の下線部については、自分の言葉に変えたつもりになっていたか、あるいは他の表現に変えるのが難しくて後で考えようと思い忘れてしまった可能性があるという。

二つ目の下線部については、資料の内容に賛成して別の言葉で自分の意見として書こうと思ったが、資料とほとんど同じ表現になってしまったと答えた。資料の内容と同じ意見である場合、どのような表現を使う必要があるか尋ねると、クラスの教材の中にあったことは覚えているが、どの表現を使えばよいかは覚えていないということであった。前の学期からの引き継ぎで、記事

の内容に同意する場合、引用元を示さずに自分の発想のように書く学生が多いという報告があったため、2017年度秋学期は、資料の内容に同意する場合、「…が指摘しているように、…（と考えられる）」などを使うよう指導してきたが、Cにはまだこれがしっかり定着していないことがわかる。

このほか、Cは2ヶ所で引用をしているが、こちらも引用形式などにやや問題がある。1ヶ所目は“「”を用いて引用の始まりを示し、二つの文を直接引用しているが、ページ数の記載がなく、引用の終わりに“””がない。クラスでは二文以上を直接引用する場合は、「」を用いる代わりに、「…は以下のように述べている。」と書き、改行して右に2字下げで引用するように指導していたが、そのようになっていない。また、不要と思われる情報も引用されており、引用の必要性と量の面でもやや不適切である。

もう1ヶ所は直接引用と間接引用の組み合わせだが、直接引用の部分にページがなく、やはり引用形式が不適切である。一つ前のレポート4では直接引用の箇所にページを入れているため、ページの必要性は理解していると思われるが、まだ十分に定着していない、あるいは、不注意で忘れたと思われる。

Cは前の学期にJ6作文、総合日本語6-8でも引用について学んでおり、目的をもって引用しようとする姿勢は伝わってくるものの、引用の3ヶ所すべてにまだ不適切さが残っている。

### 3.4 インタビュー調査の結果と考察

次に、質問1から5についてインタビュー調査の結果を報告し、考察する。

#### 3.4.1 レポートを書く力の変化

質問1のレポートを書く力については、3名とも上達したと答え、構成や内容に関することと日本語の表現に関することをそれぞれ挙げている。

Aは書き言葉が意識できるようになり、レポートとはどのようなものかがわかるようになったと答えた。以前は常体と敬体を混用していたが、だ・である体を用い、表現も書き言葉を用いることができるようになったと述べた。また、学期のはじめは、調べたことを引用してまとめるだけだったが、レポートでは自分の考えを述べなければならないということがわかり、考えを述べられるようになったという。

Bはレポートの構成と間接引用の仕方が上達したと回答した。構成に関しては、例えば「はじめに、現状、原因の分析、対策」とするようになったと例を挙げて説明した。間接引用については、以前は文の最後に（ ）で出典を示す書き方のみであったが、他の形式も使えるようになったということである。

Cはレポートの構成力と語彙力が高まったと答えた。以前は構成がうまくできなかったが、「はじめに、目的」などしっかりと書けるようになったという。語彙については、読解資料から語彙を学び、また、書き言葉と話し言葉が区別できるようになり、中国語とは異なる漢字語彙の使い

方もわかってきたということである。

以上をまとめると、レポートの内容や構成に関して、Aは求められているレポートが何かを理解して課題に沿ったレポートが書けるようになったこと、BとCは構成を意識したレポートが書けるようになったことを挙げている。また、表現力に関して、Aは書き言葉、Cは書き言葉や語彙、Bは引用のさまざまな表現が身についたと自己評価している。引用について言及したのはBのみであるが、J7作文は引用の仕方だけを学ぶコースではない。Aがレポートとは何かということを理解したと答え、BとCが構成力を身につけたと答えたことは、コースの大きな目標が達成されたことを示している。

Aはレポート5で引用に関してさまざまな問題が残っていたが、学期を通してみると、自己評価の通りレポートを書く力は大きく伸びた。数野(2018)で指摘したように、Aは学期の前半では求められているレポートがどのようなものか理解ができておらず、レポート2では引用の「量」が多すぎ、調べた内容の報告に終始して、意見がまったく述べられていなかった。本コースで求めているレポートは調べたことをまとめるだけのレポートではなく、引用しながら自分の考えを書くレポートであることを個別にフィードバックしてからは、引用の前後に解釈を書き、課題に沿った「調べて考えて書くレポート」が書けるようになってきた。引用についてはまだ練習が必要であるが、レポートで何が求められているかがわかったのは大きいと言えよう。

### 3.4.2 レポート作成時に意識していたこと

質問2のレポートを書くときに気をつけた点については学生によって異なる。AはCiNiiで資料を探して読み、筆者の考えを参考にして自分の発想を整理すること、論点を探ること、そして、日本人のような自然な文を使うことに気をつけたという。Bは、最も気をつけたのは文法であり、正しい日本語で書けるようにしたと回答した。また、自分には考える力が不足していると認識しているため、意見をたくさん書くように気をつけたという。Cは「はじめに」に書いたことと「おわりに」に書いたことがつながるよう気をつけたという。一年を通じ、レポートを書き終えたあとで読み直す習慣が付き、全体のつながりを見直すようになったということである。

Cが述べた「はじめに」と「おわりに」のつながりについては、クラスでも序論の問題提起、本論で述べた内容、結論を対応させるよう指導していたので、それがしっかりと意識されていたことがわかる。Aは論点を探ること、Bは意見を書くことという内容面だけでなく、日本語自体の正確さや自然さについても言及している。J7作文は日本語の文法や表現に関してはレポートでよく使う表現を紹介したり、フィードバックの時に間違いを指摘し修正させたりする程度で、内容や構成、引用の仕方の指導に重きを置いているが、留学生はやはり日本語力自体を伸ばしたいという気持ちも強いことが明らかになった。

これについて、Aはインターネットのサイトで自分の書いたレポートを日本人に見てもらうことがあったと回答した。Cも質問1に対する回答で、学期中何度か日本人のチューターにレポートを見てもらい、中国語と日本語の漢字語彙の使い分けを教えてもらったと答えている。立教大

学では日本人学生とともに受講する全学共通科目や学部の科目などのレポートは提出前に日本語を添削してもらってもよいが、日本語自体の学習を目的とした留学生向けの日本語科目のレポートや課題は提出前に添削してもらわないという認識があったが、シラバスに明記されておらず、この点が留学生に伝わっていないことが明らかになった。これについてはセンターの教員で共有し、次の学期からシラバスにも明記することになった。

### 3.4.3 引用

レポートの作成で何に気をつけたかをという質問2に対して、引用を挙げた学生はいなかったが、質問3では「引用の際、どのようなことに気をつけていたか」を尋ねた。続いて、「レポートを書くとき、引用の仕方の書かれたプリントをいつも確認していたか」、「引用は何のためにするか」を質問した。

Aは引用の仕方は難しいため、レポート4まではクラスの資料を確認しながら書いたが、最後のレポート5は期末の作文テストの練習も兼ねて、プリントを参照せず書いてみたと答えた。また、間接引用は自分の言葉に変えるために日本語力が必要で難しかったが、間接引用を使ったほうがいいので、使うようにしたと述べた。そのままの表現ではなく自分の言葉にすることでさらに理解が深まるという。引用の目的については、自分の論拠を支持する時、説得力を高めるために引用すると回答した。

Bは引用の形式に気をつけ、多様な形式を使うようにすること、なるべく直接引用ではなく間接引用を使うようにすることを意識したが、自分の言葉で間接引用するのは少し難しく、間接引用にしようとしても直接引用によく似た形式になってしまうことがあったという。なぜ間接引用を使ったほうがいいのか尋ねると、直接引用だと長くなるが、間接引用の場合は簡潔に表現できると答えた。引用の仕方の書かれたプリントは常に確認していたという。引用の目的については、ある問題の対策について自分の思いつく方法はそれほど多くないため、資料を調べて他の人の考えた対策を引用するという例を挙げた。

Cは間接引用の時は自分の言葉に言い換えるように気をつけたが、自分の言葉で表現することができずに、結局ほとんど同じ言葉を使ってしまうことがあったと回答した。言い換えるのが難しいときは直接引用を使ったため、直接引用が増えたという。また、引用に続けて自分の意見を書かなければならないため意見を書こうと思ったが、結局引用した部分と同じような言葉が多くなったと答えた。引用の仕方の書かれたプリントは、B同様、常に確認していたという。引用の目的については、自分の意見を支えて、ある基盤に基づいて意見を書くためと回答した。

引用の目的については、3名ともさまざまな目的のうちの一つを答えたただけであったが、基本は理解していると言えよう。また、全員、直接引用ではなく間接引用を使おうとする意識を持っていたが、自分の言葉で言い換えてまとめることは難しいと感じていることがわかった。間接引用では自分の言葉でまとめなければならぬと理解しつつも、結局あまり言い換えができないということもBとCは指摘している。その他、Bはなるべく異なる種類の表現を用いて引用するこ

と、Cは引用の後で自分の意見を述べることを意識していたことが明らかになった。実際、レポート5においてもBは引用の際に多様な表現を用いており、Cは引用の前後に自分の意見を述べようとしていることが見て取れた。

### 3.4.4 レポート作成において難しかった点

質問4でレポート作成において難しかったことについて尋ねると、AとBは日本語と内容、Cは日本語と答えた。

Aは論点を定めること、つまりレポートで何を書けばいいか考えることが難しかったと答えた。また、論理的な流れを示すためには接続詞が必要だが、難しいと回答した。Bは日本語が正しいかどうかは気になり、ウェブサイトで調べるのに時間がかかったと答えた。名詞と動詞の組み合わせを確認するためにyahooやJ7作文の授業で紹介された黒橋・河原研究室の「格フレーム検索」で単語を検索したという。また、調べた資料が自分の意見の論拠になるか見極めるのが難しく、強引に組み合わせたとあると答えた。Cにとって最も難しかったのは動詞の時制で、その他、言いたいことを日本語で表現することが難しかったという。

Aは論点を定めること、Bは自分の意見の論拠となりうる内容を引用することの難しさも挙げているが、3名全員が挙げたのは日本語自体（文法、表現）の難しさである。留学生の場合は母語話者と異なり、日本語自体でも苦勞をしていることがわかる。

### 3.4.5 J7 作文コースの学習内容・活動

質問5ではこのクラスで学習したこと、練習したこと、活動などで、レポートを書くときに役に立ったことがあるか、また、今学期クラスで扱っていないもので扱ってほしかったこと、もっと練習したかったことがあるか尋ねた。

Aにとって最も役立ったのは他の学生との話し合いの時間だという。同じテーマでも素晴らしい構成を考えているクラスメートがいて参考になった、自分に足りない点も聞いてよかったということである。また、学期のはじめに、調べたことをただ引用してまとめるのではなく、自分の考えを書くことが重要だというフィードバックを教師（筆者）から受け、それが勉強になったという。このことは、別のクラスで自分の考えを述べなければならぬときにも役立ったということである。なお、他のクラスの活動についてだが、レポートで何かを引用する場合は要約する力が必要なので、J7 聴解会話のクラスで視聴したビデオを要約する活動が役立ったという。もっと練習したかった項目については、間接引用をもっと練習できると良いと回答した。最後に、アンケート調査のレポートが非常に面白かったので、もっとやりたかったと答えた。

Bは構成メモを書くことが役立ったと答えた。このクラスを受講するまで、構成メモを書いていなかったが、構成メモがあると、実際にレポートを書くとき順調に書き進められることがわかったという。二つ目の質問については特にないと答えた。しかし、グループでアウトラインを発表し合う活動は効果を感じず、読解資料の一部を引用する練習も回数が多かったという。

Cは空欄に接続詞を補って文と文をつなげる練習が役立ったと述べた。また、グループになって、レポートのアウトラインについて自分がどのようなことを表現したいか、資料に基づいて何を伝えたいかなどを伝える活動で、自分の言いたいことを表現する力がついたと回答した。もっと練習したいと思った項目としては、Aと同様、間接引用の練習を挙げた。資料を読んで指定された部分を言い換えて引用する練習があったが、これは語彙や表現力がより豊かになると思うため、もっと練習したかったということである。

ここで特徴的なのは、AとCが役立った、もっと練習したかったと答えたことについて、Bが異なる意見を持っている点である。AとCはグループで自分のレポートのアウトラインについて話す活動について役立ったと述べているが、Bは効果がなかったと答えている。また、AとCは資料の一部を間接引用の形でまとめる練習がもっと練習したかったという希望を持っているが、Bは練習の回数が多かったと答えている。Bはクラスの中でもよくできる学生であったため、AとCが必要とする活動や練習の必要性を感じなかったことが推測される。しかし、最終レポートでも形式や要約に不適切さの残っていたAとCはこの練習の必要性を感じているため、今後この練習が必要だと思われる。

#### 4. おわりに

以上、J7作文クラスの実践概要を報告し、受講学生のうち3名のレポートの分析とインタビュー調査を実施した。インタビュー調査の結果、レポートを書く力が上達したか、何に注意してレポートを作成したか、何が難しかったかという質問に対しては、内容・構成や日本語の表現力など引用以外の回答が多かった。しかし、引用について尋ねると、全員が引用の目的を理解していること、間接引用で書こうという意識を持っていることが明らかになった。一方で、自分の言葉でまとめて間接引用をすることの難しさを全員が感じていることもわかった。レポートの分析でも、引用の基本は身についたものの、AとCには形態、形式、要約、解釈などさまざまな誤りが見られた。特に引用の範囲の示し方と要約、解釈については、さらなる練習が必要であることが示唆された。

しかし、引用元の資料を正しく理解してそれを正しくまとめる力は一朝一夕で身につくものではなく、作文のクラスだけで指導するには限界がある。インタビューでAが聴解会話のクラスで番組の内容を要約するのも練習になったと答えているように、聴解会話や読解など他の技能のクラスとも連携していくことが求められる。

また、作文クラスのレポート添削では、学生が自分で見つけた資料をレポートに引用する場合、引用の範囲や要約が適切かどうか判断しにくい場合もある。学生が自分で探した資料だけでなく、一つは指定された共通の読解資料からも引用させることにより、正しく要約できているかどうかを教師が確認し、フィードバックしやすくなる。これにより、直接引用と間接引用を使い分けているか、資料に書かれていることを自分で思いついたように書いていないかを確認することもで

き、剽窃の防止にもなるだろう。

本稿では中国・台湾からの短期留学の学生を対象に調査を行ったが、非漢字圏の留学生については調査できなかった。これは今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 数野恵理 (2018) 「ある中国人留学生のレポートを書く力の変化:— 引用の仕方に注目して —」『日本語教育方法研究会誌』24(2)、64-65.
- 中村かおり・近藤裕子・向井留実子 (2016) 「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」『2016年日本語国際研究大会予稿集』(電子版).
- 山本富美子 (2016) 「論文の『意図的ではない剽窃』の問題～モダリティの混同と解釈のない引用～」『Global Communication』、6、117-132.
- 立教大学大学教育開発・支援センター (2012、2018改訂) 『Master of Writing』立教大学大学教育開発・支援センター.
- 立教大学日本語教育センター (2017) 「2017年度日本語科目 講義内容 (J4-7)」 <<https://cjle.rikkyo.ac.jp/syllabus/pdf/2017-J4-J7.pdf>> (2018年11月1日アクセス).